

## 「商工会青年部～それは一人ではないということ～」

吉川市商工会青年部 瀧上 智一  
吉川市小松川 5 9 1 - 1  
有限会社マルタキ

「ダメだ、締め切りに間に合わない、頼んである記事がまだこない。やっぱり自分がやれば良かった。青年部活動ってこんなに孤独だったかなあ」  
初めて務めた広報委員長はあせりとプレッシャーの連続でした。

私は吉川市商工会青年部の瀧上智一と申します。

Tシャツなどの衣料品に機械を使わず1枚1枚、手作業でプリントをする、シルクスクリーンプリントの会社を営んでいます。

力加減一つでプリントの仕上がりが変わってしまう職人仕事、様々な生地に適度なプリントが出来るように日々試行錯誤しています。

私と青年部との出会いは、今では吉川市の一大イベントに成長した青年部事業、吉川ジャズナイトのポロシャツの製作です。

自分が関わったイベントの成長を見て、青年部に興味がわいたことと地元との繋がりに新たな仕事の可能性を感じ入部いたしました。

入部してからは定例会、地元のイベントに積極的に参加して親交を深めていきました。

1年半が経ち、私は広報委員会の副委員長を任され、広報誌の発行やSNSを活用した情報発信など、青年部活動の魅力を多くの人に知ってもらう為、全力で駆け抜けました。

その熱意を買われ2年目には委員長を務めることになったのです。

しかし委員長として広報誌を継続して発行することは想像以上に大変でした。

元々少ない人数での委員会活動。月によっては部員の協力を得られず、記事の編集、印刷、配布と多くの負担が委員長に偏ってしまうことも多々ありました。

広報誌作成のプレッシャーから委員会活動が重荷に感じるが増え、記事の遅れなどがあると「自分でやった方が早いなあ」と思ってしまうことは1度や2度ではありませんでした。

広報活動が続けながら自分の心には釈然としない思いがずっとありました。

みんなで一緒に作り上げるべき広報誌を忙しさを言い訳にして他の部員を置き去りにしてしまったこと。それが青年部活動本来の姿ではない事にも気が付いていました。

そして新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延。

人の集まるイベントはすべて中止。イベント案件をメインとしていた為、自社の売り上げが半分以上に激減しました。絶体絶命。

父である社長から「商工会で助成金の話を聞いて来てくれないか…」と言われ助成金をもらうために奔走し、会社を守ることを考えて動いていきました。

ついには社員の気持ちを考える余裕もなくなり、突然の休業発表。当然、社員からは不満や反発がありました。「俺らの生活はどうなるんだ。今まで会社のために頑張ってきたのに」。

会社継続の為と奔走していたにもかかわらず、その意図を伝えてこなかったばかりに社員の不信感は募るばかりでした。

自分自身も不安な気持ちで食事も喉を通らない日々が続く中、支えになったのが商工会と青年部の存在です。

商工会では複雑な助成金と補助金の相談に乗ってもらい、専門家のアドバイスを直接聞けて不安を解消することが出来ました。

青年部の仲間とはお互いの近況を伝えあい、コロナ禍を何とか乗り切ろうと励ましあう毎日。

そんな中、私の業種と同様に大きな打撃を受けた縫製業を営む部員から一つの提案がありました。吉川市のご当地キャラ「なまりん」をプリントしたマスクを販売してみようというのです。私の会社でなまりんをプリント、縫製業の部員の会社でマスクを縫う。そして今までにない新しいマスクを作り上げる。そんな提案でした。

話をもらった時には「なまりんをプリントしたマスクなんか売れるのかな？」と半信半疑でしたが、自身の事業が大変な時に私の事を気にかけてくれて共に生き残ろうと行動する姿勢とその真剣な眼差しに「自分が動かなければ、何も変わらない」と意を決し、動き出しました。

初めての試みに右も左も分からずただひたすらにプリントし、縫製工場に生地を持っていく。デザインや構図、マスクのカラー展開、コロナ禍に必要とされた抗菌仕様の生地の選定など、毎晩のように打ち合わせをする日々。

最初はただ売り上げが上がりさえいいという気持ちで始めた仕事。しかし、いつしかみんなに必要とされる商品に作り上げたい、マスク不足で不安な日々を送っている人達にマスクを届けたい、そんな想いに変わっていきました。

ある時、ふと自分の中に広報活動を一人で抱え込み孤独やあせり、葛藤を感じていたあの頃を思い出しました。そして今、仲間と一緒に一つのものを作り上げ、同じ目標を持つということがこんなにも心強く、ワクワクするものだったのかと気づかされました。

なぜあの時にもっと仲間を信頼して一緒に広報誌を作り上げることが出来なかったんだろうと。

完成したなまりんマスクは市内の飲食店、薬局、ペットサロンなど様々な青年部員のお店で販売、さらには近隣の大型商業施設でも取り扱いがスタート。

SNSで話題はさらに広がり、新聞やネットニュースでも大きく扱われ、全国から注文が殺到。

そしてなまりん柄だけでなく、企業やお店のロゴをマスクにプリントするサービスを始めたことで販路が広がり、新たな可能性を秘めたものへと変わることができました。

青年部活動を通じて得た、仲間との信頼関係から生まれたなまりんマスク。それがコロナ禍という窮地

から私や会社を救ってくれました。本当に感謝しています。

そして現在、青年部活動も残り1年を切りました。私の人生に様々な彩りをくれた青年部。感謝の念を持って、新たな熱意と共に2回目の広報委員長を務めています。

これまでの経験から委員長としてメンバーに伝えていることがあります。それは広報活動の大切さと「青年部は一人ではない」ということです。

一人で作る広報誌がどれだけその可能性の幅を狭めていたのか、今なら分かります。

今では記事を担当したそれぞれの部員の個性が全面に出る掲載の仕方をとったり、広報誌を見てくれた人に季節の彩りを感じてもらえるような明るい話題も掲載しています。

SNSでは吉川市の魅力を再発見できる青年部フォトコンテストなど委員会の枠を超えて新しい事に挑戦しています。

青年部の魅力だけではなく仲間や地元との繋がりをもっと広く伝えたい。そんな私の気持ちを感じ取ってもらえたのか、広報誌の作成やSNSの発信にみんなが積極的になってきました。

そうした活動の結果、昨年度の広報コンクールでは吉川市商工会青年部として初めて広報誌部門、広報活動部門の2部門で優秀賞を受賞することが出来ました。

青年部での経験は自分の会社にとっても大きな糧になりました。経営者としての立場からすべてのことを一人で背負い込むのではなく社員をもっと頼り、信頼することで今までとは違う関係を築け、少しずつ社員との距離が縮まってきたことを実感しています。お互いをフォローしあって一緒に会社の未来を描く。もう以前のような孤独感はありません。

いずれは開けるコロナ禍、その時に対応できるように青年部で学んだことや、培った地元との繋がりを活かした会社づくりを目指して進んでいきます。